

「住みたい街」が「住んで良かった街」になる移住・定住促進策

福岡県最西部に位置する糸島市は、平成22（2010）年1月1日に前原市・志摩町・二丈町の1市2町が合併して誕生した。福岡市に隣接するという立地条件の良さでベッドタウンとして発展する一方、合併により玄界灘に面する海辺から田園地帯、里山まで多様な自然に恵まれた地域となった。地元のタウン誌「福岡ウォーカー」が行った「住みたい街ランキング」のアンケートでは、糸島が福岡県内で1位に輝くなど、移住先としても注目を集めている。「住みたい街」が「住んで良かった街」になるような移住・定住促進策を中心に、月形祐二市長に話を聞いた。



福岡県糸島市長
月形祐二
(つきがた・ゆうじ)

昭和33（1958）年6月28日生まれ。旧志摩町立桜野小学校、西南学院中学校・高校を経て、昭和57（1982）年3月、西南学院大学法学部卒業。同年4月、（株）モリタに就職。昭和61（1986）年から平成14（2002）年まで、太田誠一衆議院議員の秘書を務める。平成15（2003）年4月、福岡県議会議員選挙に立候補し当選。平成19（2007）年4月、再選。平成23（2011）年4月、三選。平成26（2014）年2月、糸島市長選挙に立候補し、当選。現在1期目。

国会議員秘書時代に学んだ「清貧」「知足」の政治姿勢

——政治家を目指したきっかけを教えてください。

〈月形〉 父が旧志摩町の議員で、議長まで務めた人でした。選挙前になると毎晩遅くまで人が集まって話をしていました。小さいころは「いったい何をしているんだろう」という感じでしたが、大人になると父が自分のためではないことを一生懸命やって、良い地域社会をつくろうとしていることがわかってきて、政治家の仕事に憧れを抱くようになりました。

しかし父は、社会を知らずに政治の世界に入るべきではないと考えており、自分自身もそう思っていたので、大学を卒業して4年ほど、民間企業に勤めました。利益を追求しつつ社会の役に立つという使命を果たす企業のあり方や、マネジメントの方法など、いろんなことを学びました。

その後、国会議員の秘書を16年間務めるわけですが、このときの経験や築いた人脈は今も貴重な財産になっています。何より太田先生から、常に「清貧」「知足」を心がけて政治に臨む姿勢を学ぶことができました。

——その後、福岡県議会議員を3期務められますが、県議時代の思い出は？

〈月形〉 県土整備委員会の委員長として、五箇山ダムの建設を進めたことです。民主党政権が「コンクリートから人へ」というスローガンを打ち出し、計画がストップしていましたが、私は人を守るためのコンクリートは必要と考えていました。たびたび渇水に悩まされる福岡都市圏の人々のためにも建設しなければならないと主張し、いち早く検証を終えて建設に向けて動き出すという流れをつくりました。

——糸島市長選に出馬された動機は？

〈月形〉 松本嶺男前市長は県の職員だった方で、旧前原市が市長のリコールなどで混乱していたときに、有志の人たちから、混乱を鎮めるために出馬を依頼されたそうです。前原市長を2期務めた後、糸島市の初代市長として1期務められ、松本市政を引き継ぎ「豊かさ実感のいとしま」の実現のため私が立候補しました。

頑張る市民を応援するのが 行政の役割との意識改革を徹底

——はじめて市長として市役所に入ったとき、職員の意識や職場風土についてどう感じましたか。

〈月形〉 みんな真面目で勤勉で、とてもいい雰囲気でした。ただ、少しおとなしいかなというのを感じましたね。

私が掲げた公約の柱の1つに、「ブランド糸島」の確立があります。あえて「糸島ブランド」ではなく「ブランド糸島」と言っているのは、単なる特産品づくりではなく、糸島という地域をまるごとブランドにしたいと考えるからです。したがって、職員自身もブランド糸島の重要な一翼を担っており、それにふさわしい職員になってほしいという思いがあります。

また、ブランド糸島の確立に向けて主人公となるのは市民の皆さんであり、市民が頑張っていることを応援し発信していくのが行政の役割であると考えています。職員には、「市民の力をどう引き出すかが行政の最大の使命であるというふうな考え方を転換することが重要」と伝えています。

職員の常として、自分たちで作ってしまったり、自分たちでやってしまったりになります。ところが、公務員なので民間の現状をうまく把握できていないところがある、だからこそ民間とコラボすることが必要なのです。

また従来は、どうしても自分の地域を外にアピールすることに消極的で、「こんなことを発信してもマスコミは取り上げてくれないだろう」と、自分で諦めてしまっていました。でも、「取り上げるかどうかはマスコミが判断すること。君たちは自信を持って、糸島はこんなにすごいんだということを発信し続けてください」と言っています。

糸島のカキを食べるために 1シーズンで約30万人が来訪

——「ブランド糸島」の中身について、もう少し詳しく説明してください。

〈月形〉 糸島市は、北部から南西部にかけて玄界国定公園に面しており、北半分は玄界灘に突き出し

た形の糸島半島、南部は佐賀県との県境を脊振山地が連なっています。福岡市の中心部まで電車でも車でも30分以内という非常に交通の便が良い立地でありながら、海、離島、山、水田など多様な自然が息づいています。当然ながら、それぞれの土地の土壌や気候に合った農産物、海産物も豊富です。

これらの特産品を扱っているJA糸島産直市場「伊都菜彩」は、直売所として売上高日本一を誇ります。売り場の広さも九州最大級と言われ、名物のカキや「ふともずく」をはじめとする海の幸、さまざまな種類の野菜やくだもの、畜産物や乳製品など、あらゆる食材がここで揃うといっても過言ではありません。

特に有名なのはカキです。糸島半島沿岸部一帯は、入り組んだ静かな湾に山からの養分が流れ込み、カキの養殖に最適な条件が揃っています。そのため、港の近くなどにカキ小屋がたくさん並んでおり、冬場の名物として有名になりました。近年は1シーズンで約30万人ものお客さんが、市内外から詰めかけるまでになっています。

糸島は、天然マダイの水揚げ量が5年連続日本一のまちでもあります。玄界灘の荒波にもまれて育ったタイは、身がしまり脂が乗って品質は最高です。

また、いちごの「あまおう」も糸島産は市場での評判が良く、その加工品も豊富です。あまおうについては私自身、京都市場までトップセールスに行きました。乳製品については、(株)糸島みるくぶらんとという会社が「伊都物語」のブランドで、糸島の酪農家が生産した生乳を原料にヨーグルト、チーズ、プリン、アイスクリームなどを作っています。伊都物語の商品は、日本航空のファーストクラスやJR九州クルーズトレイン「ななつ星」で提供されるなど、非常に高い評価を得ています。

民間の「東京事務所サービス」を利用し糸島の魅力を全国に発信

〈月形〉 「ブランド糸島」の確立には、まず東京で糸島を知ってもらうことが重要です。東京で認められれば全国に広まります。そのために平成26(2014)年7月、(株)日本雇用創出機構が実施する「東京事務所サービス」と契約しました。東京事務所サービスは、全国の地方自治体を対象に、地元企



移住相談会



空き家相談会

業の産業振興策や地域の観光PRなど、地域活性化に向けた取組を自治体職員に代わって総合的にサポートするサービスで、糸島市内産品の首都圏における販路拡大や観光誘致など、シティセールス活動の拠点として機能しています。

たとえば、アンテナショップを開設したり、デパートの催事で糸島市のPRをしたりしています。また、これをきっかけに神奈川県相模女子大との連携が始まりました。糸島市地域協働活動プログラムの募集に、同女子大の学生3名が応募し、本市を訪れて生産者との交流などを行ったのが始まりです。平成28（2016）年7月には、「これからの女性の働き方研究」連携協力に関する協定を大学と締結しました。

昨年9月には、協定に基づいて7名の学生と2名の教職員が糸島を訪問し、農家や企業などで働く女性にインタビューするなどして、女性が生き生きと働くためにはどうしたらよいかを調査しました。また同大学の学園祭では、地域物産展で糸島の産品を紹介し、地域の魅力を発信してくれました。

10万都市として誕生したが 合併後は人口が減少傾向に

——移住・定住促進の取組についてお聞かせください。いつごろから本格的な取組が始まったのでしょうか。

〈月形〉平成25（2013）年度に定住促進の担当部署を新設しました。現在は地域振興課内に定住促進の担当を置いています。26年2月に私が市長に就任し、間もなく移住に関する専門サイトを立ち上げました。27年度には定住促進行動計画を策定し、28年度からは定住嘱託員、今年度からはそれに加えて

地域コーディネーターを配置しています。

定住嘱託員は、移住希望者の窓口として相談に乗ったり、実際に糸島を訪れた方を案内したりする役割です。移住コーディネーターはより地域に密着した存在で、市内15の小学校区のうち人口減少の問題が顕在化している10校区に配置しています。昨年度は試験的に3校区に置き、今年度から10校区に広げました。コーディネーターの方には、移住希望者と移住先とのミスマッチが起こらないよう、地元の生活ルールや行事などについて移住希望者に説明したり、空き家の調査をしたりという役割を担っていただいています。

移住・定住促進に力を注ぐようになった背景には、やはり人口減少があります。糸島は福岡市のベッドタウンとして発展し、平成22年1月の合併時には10万都市となりました。しかしその後は減少する一方でした。国立社会保障・人口問題研究所の人口推計によると、2040年には8万3311人まで減少すると考えられています。人口はまちの元気のパロメーターであり、人がいなければ地域に活力は生まれません。そういった危機意識から策定した定住促進行動計画では、定住促進戦略の基本方針を定めまし

た。現実的に人口が減少している中で、人口の維持・増加を図るためには、的を絞り、重点的かつ効果的に定住促進施策を展開していく必要があります。そこで、子育て世代をメインターゲットに糸島市に人を呼び込む転入促進と糸島市から人を外に出さない転出抑制の2つの側面から定住促進施策に取り組むとともに、積極的な情報の発信と収集に努めています。



子育て教室



九大寺子屋

2～3週間の糸島生活を体験できるトライアルステイ

——移住・定住促進の具体的な取組についてお聞きしたいと思います。まず情報発信・収集について。

〈月形〉 定住促進の専用サイトは「きっと満足 糸島生活」と名づけられたもので、糸島への移住を考えている人向けの情報と、住まいを探している人向けの情報が載っています。前者については、糸島市の紹介から移住までの流れ、移住者の声、子育てや教育などに関する施策、生活シミュレーションなど、移住を考えている人にとって役立つ情報が満載です。後者については、分譲・賃貸の一戸建てやマンション、土地、空き家バンクの情報が掲載されています。

市内には現在500件ほどの空き家がありますが、空き家バンクに登録されているのはまだ34件です。盆正月に帰ってくるから、仏壇を置いているからなどの理由で、貸した方がまだまだ多いのが現状です。貸す方も借りる方もウィン・ウィンの関係になれるような方法を探ることが大切で、そのためにもコーディネーターの役割が大きくなります。

また、トライアルステイも実施しています。これは文字通り、移住を考えている方に糸島市での生活を2～3週間体験していただく事業です。体験された方は糸島の良さだけでなく課題も肌で感じることで、課題の解決策を考えたいうえで安心して移住を決断することができます。また行政にとっては、参加者の声を通じて市の魅力と課題などを収集・発信することができます。

はじめて実施した平成26年度は、10組の応募を行ったところ、111組ものみなさんに応募していただ

きました。体験者からは、「物価の安さ、地元産食材の豊富さは想像以上」「子どもが海で伸び伸び過ごせた」「空気がおいしい」「みんなで地域を盛り上げていると感じた」といった評価をいただきました。その一方で課題としては、「車を使わなくても移動できる手段がもう少し整ってくるといい」「最終バスの時刻が早い」「少し閉塞感を感じたところもある」「夜が真っ暗で安全面に不安」といった声がありました。

情報発信という面では、企業に対する発信も重要と考えています。福岡市や唐津市の企業を訪問し、社員さんの住居として糸島をPRするといった取り組みもしています。

3地区に子育て支援拠点を設置し子育て広場などを実施

——次に子育て支援策についてお願いします。

〈月形〉 子育て支援センターでは、前原、志摩、二丈の3地区それぞれに子育て支援拠点を配置しています。子どもたちを伸び伸びと遊ばせながら保護者同士の情報交換を行う「子育て広場」、年齢に応じた親子のふれあい遊びや、育児のワンポイントアドバイスなどを行う「子育て教室」などの子育て支援事業を行っています。また、子育て情報の収集や発信を行うとともに、地域での自主的な子育て支援をサポートしています。

子どもを預ける施設としては、19の私立保育園と8つの私立幼稚園があり、保育園のうち5園では20時までの延長保育を実施しています。また、次のような減免制度があります。

- ・入所児童が当該入所年度の4月1日現在3歳未満であり、かつ入所児童が当該年度の18歳未満の



九大寺子屋



いとしま学のテキスト

兄弟姉妹の中で第3子以降であれば、保育料が免除され無料。

- 私立幼稚園に同時に3人以上のお子さんが就園している市内在住の世帯に対して、3人目以降の園児の入園料、保育料などを補助。

また、小学校については、市内全校で放課後児童クラブ（学童保育）を実施しており、土曜日も、夏休みや冬休みの長期休業中も開所しています。

子どもの医療費については、平成28年10月より、助成の範囲を入院については小学3年生までだったのを中学3年生までに、通院については就学前までだったのを小学6年生までに、それぞれ拡大すると同時に、定額制で自己負担額を導入しました。

病児・病後児保育施設コアラでは、市内にお住まいのお子さんや、糸島市内に勤務する保護者に養育されているお子さんが、病気の回復期または病状の急変が認められない状態で集団生活が困難な場合に、一時預かりを行っています。

九州大学の学生の力を活用し 小中学生の学習意欲向上を支援

——次に、教育の充実や教育環境の整備についてはどんな施策がありますか。

〈月形〉 九州大学と連携して子どもたちの学習支援を行っています。その1つが「九大寺子屋」で、九大生が市内の小学校を訪れ、自らが研究する専門知識を生かして小学校での勉強が実社会でどう生かされているかなどを教えています。

大学での研究内容などを講義や科学実験を通して分かりやすく教える「ダビンチタイム」は、「宇宙のお話」「体と形」「電池をつくろう」などさまざまなテーマで実施しています。

平成27年度は、モデル事業として加布里小学校の3・4年生を対象に、平日放課後に実施しました。保護者からは、「子どもが勉強やニュースに興味を持ちました。」など、好評をいただいています。平成28年度は、加布里小学校と福吉小学校で、土曜授業の一環として実施し、今年度は5校に拡大しています。

「伊都塾」は、参加を希望した小中学校の児童・生徒が自ら課題を持参して、分からない点などを九州大学の学生と一緒に考え、学習を進めるものです。また、九大の学生が自分の専門性を生かした講座を開き、中学生に授業を行います。

英語力向上にも力を入れています。2020年度から完全実施される小学3・4年生の英語教育を、平成28（2016）年度から先行実施。また、英語教育を推進する専門職員を配置し、各小中学校を巡回して、英語教育に関する指導・助言や教職員の校内研究の企画などを行います。さらに、中学3年生の希望者を対象に、各中学校で英検3級試験を実施し、受験料の一部を補助します。

「いとしま学」のテキストを配布し 小中学生に糸島の魅力を発信

〈月形〉 もう1つ、昨年度から実施しているのが「いとしま学」です。糸島の歴史・文化・自然・産業などについてわかりやすく解説したテキストを小学5年生と中学1年生に配布し、総合的な学習の時間などで活用してもらいます。「糸島に生まれた子どもたちが、自分の言葉で糸島を語れるようになってほしい」というのが、テキストに込められた私たちの思いです。

テキストは、①大陸と融合した歴史文化、②自然



いとしま学の授業風景

と共生する産業、③未来を創り出す可能性。という3つの視点から糸島の魅力を探ったものです。小学校版については、市内在住のイラストレーターによるイラストで、昔の暮らしの様子などを楽しく表現しています。中学校版については、糸島で働いたり生活している人の具体的な姿を紹介し、生徒自身の進路設計にも役立てることができるよう工夫しています。

小中学生時代に地元の姿を体系的に学ぶことで、大人になってもここで頑張ろうという気になってくれるかも知れないし、将来もし糸島を離れる場合でも故郷を誇りにしてもらえないのではないかと思います。テキストはぜひ大人の人にも見てもらいたい内容なので、増刷も検討していきたいと考えています。

——生活環境に関しては、どんな移住支援策を打ち出していますか。

〈月形〉 まず、平成27（2015）年度からマイホーム取得奨励金の制度をスタートしました。市内でマイホームを取得した方に、建物にかかる固定資産税相当分を3年間、商工会の商品券という形でお返する仕組みで、移住促進と転出抑制という2つの目的があります。平成27年度は505件の申請があり、そのうち市外からの転入が280世帯・876人、市内での転居・建て替えが225世帯・784人です。

仕事の面については、企業誘致も積極的に進めており、これまでに14社を誘致し、約700人の新たな雇用を生み出しました。新規就農される方に対しては、青年就農給付金の制度などで支援しています。

——九州大学伊都キャンパスができ、来年には移転が完了しますね。

〈月形〉 現在、学生と教職員を合わせて約1万2800人が伊都キャンパスにおり、最終的には約1万8700人になる予定です。海や田園風景を売り物にする田



農海産物

舎はたくさんありますが、それに加えて九州大学という知の拠点を有するというのは糸島市の大きな特長であり、財産です。彼らは知識集団であり、若者であり、よそ者でもあります。我々が気づかないことを新鮮な視点から気づかせてくれるものと期待しています。

九州大学とは連携協定を結んでおり、連携・交流は100以上に上ります。このうち組織対応型連携事業では、糸島のまちづくりに寄与する研究に対して助成を行っています。平成28（2016）年度については、「糸島市コミュニティバス利用度改善のための調査・研究」「ICT街づくり推進事業」などが採択されました。

糸島市九州大学連携交流補助金事業は、市民と九州大学関係者が交流することを目的に、一緒に地域を盛り上げようとする取組に対して補助金を出す仕組みです。

——今後、糸島のまちづくりをどのように進めていかれますか。

〈月形〉 これからは日本全国ほとんどの地域が人口減少社会に直面することになります。その中で糸島は、やはり減少傾向に転じたとはいえまだ余力があるので、今のうちにしっかり“坂を下るための準備”をしていきたいと思っています。つまり、人口減の中でも本当の意味で豊かさが実感できる地域にしていきたいですね。

——最後に、職員へのメッセージをお願いします。

〈月形〉 糸島市の職員に対しては、「ブランド糸島を進めるため、職員自らブランドたれ」と言っています。常に市民サービスの担い手であるという意識を持ち、市民への接し方を勉強してほしいと思います。

——今日はありがとうございました。